



*Dialogue*  
Creating the Next 60 Years

『記念事業実施報告書』

2014年6月22日-24日

フィールド・トリップ to 福島



献学60周年記念事業  
国際基督教大学



# Dialogue

Creating the Next 60 Years

ICU60 周年記念事業・福島フィールドトリップ

山口富子

ICU60 周年記念事業・福島フィールドトリップは、2014年6月22日から24日までの期間に行われ、学部生2名、大学院生1名、留学生4名、教員、アシスタントの計9名が参加した。6月22日は、福島県いわき市を視察し、23日、24日は福島市を視察した。

6月22日は、現地のボランティアの柳沼幸一さんの御好意により、小名浜港など福島県の沿岸部を中心に、福島県いわき市を視察する機会を得た。小名浜港は津波で甚大な被害を受け、現在も一部工事を行っている場所があった。

その後豊間地区を通り、薄磯地区へ移動し、薄磯で語り部されている大谷慶一さんから津波のお話を伺った。薄磯地区は震災時、8mから9mの津波が到達し、いわき市内における津波被害が最も大きかった地域である。大谷さんは3月11日当時のご自身の体験を語ってくださっただけでなく、薄磯地区がもともと抱えていた人口減少や地域での雇用といった日本の集落が抱える問題点についても指摘されていた。

お話を伺ったのち、津波の被害を受けた四倉地区や久之浜地区などを見学した。久之浜地区では、店舗が被害を受けた方たちが、久之浜小学校に隣接したプレハブの復興商店街で、営業を行っていた。久之浜地区では地震後に発生した火災の影響で更に被害が拡大した地域であるが、当時の写真とともに、商店街の方のお話を伺う事ができた。

異議、双葉郡に移動し、福島第一原発事故の放射能漏れの影響による被害を中心に視察を行った。最初に行った双葉郡広野町は、原発事故後に全戸避難となった地域である。2013年9月に緊急時避難準備区域解除となったが、現在でも住民の帰還が進んでいない。それから、双葉郡楡葉町にあるJヴィレッジに向かった。Jヴィレッジはサッカーのナショナルトレーニングセンターであったが、原発事故後は東京電力の現地事務所となり、事故収束のための最前線として機能している。警備員が配備されており、中を見ることはできなかった。

Jヴィレッジを通過後、楡葉町を見学した。この地区は、現在も原発避難解除準備区域であるため、全戸避難が続いている。また福島第二原子力発電所があるが、現在は運用を停止している。除染後に発生する除染ごみの仮置き場となっている波倉地区も見学した。数百以上と思われる、黒い袋に入った除染ごみが大量に置いてあった。

さらに北上し、双葉郡富岡町に向かった。この地域は全戸避難中であるため、震災当時の津波の被害が手を付けられずにそのまま残っていた。家や店が大破しており、付近にあるJR常磐線磐城富岡駅も津波によって駅舎が全壊していた。いわき市に戻って宿泊場所に向かう途中、いわき市中央台にある、広野町と楡葉町からの避難者が生活している仮設住宅のそばを通過した。

# Dialogue

Creating the Next 60 Years

23日は、いわき市を離れて福島市へ向かった。最初に、三河代学習センターの久保木館長を表敬訪問した。三河代学習センターは、福島市によって運営されている16ある学習センターの一つであり、様々な講座を催すなど、地域交流の中心の場となっている。久保木館長から、避難者の状況や、除染についてなど、福島市の現在の状況を伺った。学生たちからは、震災当時の学習センターの役割や、どのような状況が原発事故収束のゴールと言えるのかといった質問が投げかけられた。

午後からは新ふくしま農業協同組合（JA新ふくしま）へ行き、危機管理センターに所属している今野文治さんにお話を伺った。JA新ふくしまは福島市と川俣町を有するJAである。今野さんからは、福島第一原発事故以後の食に対する安心安全確保のための取り組みを中心に伺った。JA新ふくしまは、出荷者ごと、また品目ごと（231品目）に放射能モニタリング検査を行っており、その検査でも簡易型分析器と精密分析器という2つの機械を使用してガンマ線の量を測定していた。座学後にはJAのモニタリングセンターにて、実際にガンマ線の測定を行う現場も見せていただき、検査のより詳しい方法や機器の説明を受けた。

その後、果樹農園を経営する農家の縦山さんのお話を伺った。縦山さんはJAを通じて農産物を販売するだけでなく、個人向けにも販売を行っている。実際にりんご畑を見せてもらいながら、放射能の検査などによって更にコストがかかるようになってしまったことや、事故後に消費者が離れてしまったことなど、生産者の立場からのお話を聞くことができた。23日は福島市社会教育館こぶし荘に宿泊した。

24日の午前中は今野さんの案内のもと、川俣町と山木屋地区の除染を視察した。この地区では、救護班や運転手なども含めて1日に3000人の作業員が除染のために働いており、多くの作業員が実際に除染活動を行っている現場を見ることができた。また川俣町と山木屋地区では、花器以外の農作物は全て出荷制限がかかっているということだった。除染活動の視察を行ったのち、福島駅で解散しプログラムが終了した。

本フィールドトリップでは、震災3年後の現状を知り、我々が被災地とどのような関わり方ができるのかということを考えるため、我々の生活と最も密接にかかわる問題といえる食の安心安全をテーマとして行われた。二泊三日という限られた時間の中での視察ではあったが、特に海外出身の留学生にとっては、こうしたプログラムなくしては触れることの難しい福島の実況から多くの学びの機会を得ることができた。同様に、東京で生活するICU生にとっても多くの考察、学び、対話の機会となったといえる。特に、皆さんから様々なお話を伺う中で、震災から時間が経つにつれてより顕著になった、首都圏に住む人々の被災地への無関心という問題が何度か指摘された。実際に自分自身の目で見て、歩き、話を聞くことで、学生達はまず自分自身の問題として被災地の現状を考えることができた。対話が重視されるICUの授業形態を考えると、本フィールドトリップは、参加した学生のみならず、彼／彼女たちの経験を共有するであろう他のICU生にも、そして留学生の参加が多かったことをふまえれば、ICUという枠をも超えて有意義な学びの機会を提供するものであったといえる。今回わかったように、未曾有の大震災そして原発事

# Dialogue

Creating the Next 60 Years

故からの復興が数年では完結しないのと同様に、こうした活動を単年度限りのものとすることなく、いかに継続していくか、その点が今後の課題といえる。

## 学生による報告書

[http://subsite.icu.ac.jp/anniv60/en/events/2014/0622students\\_report.pdf](http://subsite.icu.ac.jp/anniv60/en/events/2014/0622students_report.pdf)